

令和6年度 奈良市立都祁こども園 研究実践概要

園長名 尾北 亜紀
全園児数 73 名

1. 研究主題 「心と体を動かし、主体的に活動する子どもをめざして」
～「やってみたい」と思える環境や援助の工夫～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

豊かな自然に囲まれた都祁の環境であるが、ほぼ全員が車で送迎で、校区内に遊び場も少ないなど、園での遊びの様子を見ていると、体の使い方にぎこちなさがみられる。また子ども達は自ら環境に関わり様々な経験を重ねているが、途中で諦めてしまったり、友達や保育者の考えに頼って遊んだりする姿も見られる。子ども自らが心と体を動かし、「やってみたい」と主体的に活動するための環境や援助の工夫について探りたいと考え、研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・子どもが主体的に活動できるように、それぞれの発達に合った、心と体を動かしワクワクする環境構成や援助のあり方を探る。

②研究の重点

- ・研究主題について職員間で共通理解し、各年齢の子どもの姿や発達段階に応じた取組、その後の子どもの育ちについて、定期的実践を報告し保育内容の工夫に努める。
- ・「やってみたい」「おもしろそう」「もっとしたい」と園児自ら楽しみながら、継続して取り組むことができる保育内容や、環境構成、援助の創造を図る。

③活動の方法 子どもの主体的な姿 環境構成と援助の工夫

【0歳児】 9月中旬 「ボールをトントン」

日々の遊びの中で、高月齢のA児はボールプールに喜んで入り、寝転んだり、ボールを掴んだり投げたりなど全身でボールの感触を楽しんで遊ぶ姿があった。それを低月齢のB児がじっと見ていたので、保育者が「入ってみようか」と声をかけながら、ボールプールに入れてあげると、お座り姿勢のまま両手でボールを掴んだり、トントンと叩いたりして嬉しそうに遊ぶ姿があった。また、ボールプールから転がってきたボールを目で追う姿も見られるようになってきたので、B児の手の届きそうなところに好きな玩具を置いたり、踏ん張れるように足元に保育者の手を置いたりなどの援助をしていくことで、自ら手を伸ばし掴もうとする行動から徐々に足が前に運べるようになり、ハイハイにもつながっていった。



《反省・評価》

半年以上の月齢差があるB児とA児であるが、B児はA児のしていることに興味を示し、よく見たり、よく聞いたりしている。見本となるA児の姿に刺激を受けながら、同じようにしたいというB児の思いが、行動につながっている。

クラスには、歩行が完了している子もいれば、お座りや四つ這い姿勢の子もいて月齢差があるが、ボールプールやマットを組み合わせ、ゆるやかな傾斜をつくったり、あえて段差をつくったりして環境を工夫することで、遊びの中で這う、よじ登る、跨ぐ、しゃがむ、座る、投げるなどの動きを自然に楽しめるようになってきた。

【1歳児】 11月中旬 「1人でいけるかなあ…」



サーキット遊びの用具を準備しているとC児が興味を示し、やってくる。遊び始めると落ちそうになり泣くこともあるが、やりたい気持ちはあるようで、保育者の方を見て手を伸ばし「手、持って!」というように求めたり、ギュッと手に強く力を入れて握ったりしながらも一步一步慎重に進んでいた。恐怖心につながらないように、はじめは一本橋の高さを低めにしたり、傾斜を緩やかにしたりしながらやりたい気持ちを大切に

したことで、怖くても繰り返しようとしている。日々繰り返し遊ぶ中で、サーキット遊びへの興味も続き、自信もついてきたのか、保育者の手を軽く握るだけになったり、行けそうだと分かると保育者の手を離し、一人で進めるようになってきたりしている。もっとやってみたくと思えるようにC児の様子を見て、一本橋に傾斜や高低差をつけたところ興味を示して遊び、“やってみたく、やってみたら楽しい、ちょっと怖かったけど行けた、もっとやりたい、チャレンジしたい”という気持ちが育ってきている。

《反省・評価》

日々繰り返し遊ぶ中で、自分でできたと思える成功体験が、次もまたやってみようという意欲につながっていると思う。どこに足を置けばいいか、またどのように体を使い進んでいけばいいかなど、コツや感覚をつかめるようになり、本児なりのボディイメージも育ちつつある。

C児ができるようになっていく様子を見ながら体の運びや使い方の変化に合わせて、様々な用具を組み合わせ、傾斜や高低差をつけたことで、「楽しそう!もっとやってみたく!」と繰り返し遊ぼうとする姿につながった。

【2歳児】 7月 「先生、見て見て」

動物の動きを模倣したまねっこ遊び(ワニ:腹ばい、クマ:高ばい、ウサギ・カエル:ジャンプなど)を行い、保育者が動物になりきり、ダイナミックに動きを意識しながら園児と一緒に遊び始めた。すると、子ども達も「先生、見て見て」と、ワニになったり、ウサギになったりしながら楽しむ姿が見られるようになってきたので、その姿に共感し、保育者や友達と一緒に楽しむように関わってきた。



日々、繰り返し行うことで、次第に子ども達から「ペンギンしたい」「ゾウもできる」と、保育者が提示した動物以外にもリクエストすることが増えてきた。そこで、子ども達の声を取り入れ、まねっこ遊びの種類を増やしたり、「赤ちゃんウサギになるよ」「次はお父さんウサギ」など、子ども達がイメージしやすい言葉を使いながら、動きに幅が出るようにしたりし、様々な動きを経験できるようにした。全身を使って体を動かし、一人一人が自由に表現する姿が見られるようになってきている。

《反省・評価》

体の使い方や動きにぎこちなさがあるため、体を動かすことが楽しいと感じられるように、全身を使う真似っこ遊びなどを計画的に保育内容に取り入れてきた。保育者の動きを真似て体を動かし、自分の体の使い方を知ることから始め、様々な動きを経験してきたことでボディイメージがつかめるようになってきた。

保育者が子ども達の「できた」「見てほしい」という気持ちに寄り添い一緒に遊んだり、動きを意識できるような具体的な声掛けをしたりしたことが、より楽しさを感じ、活動後の満足感や達成感につながった。また「もっとやってみたく」という気持ちは、繰り返し楽しみたいという意欲や、自由に表現しようとする姿につながった。

【3歳児】 7月上旬 「できるようになったで」

遊びながらいろいろな動きに触れ楽しんできた中で、体の動きがぎこちなく、体で表現することに自信のないD児は、新しい動きがあるとその場で止まり、友達のやっている姿を見るが、一人ではなかなか真似ることができなかった。そこで、気の合う友達と手をつなぎ、2人組で今までやってきたリズムの動き（歩く、止まる、跳ぶ、後ろ歩きなど）ができるように声をかけてみた。



すると、大好きな友達と一緒にすることが嬉しく、自分なりに真似てやってみようとする姿に変わっていった。D児「先生、できるようになったで、見てて」と見せてくれたり、みんなの前で見せ合いをしたりすると、E児「僕もできるで、見てて」とやって見せ、できた喜びをみんなで共感し合った。友達と一緒にしたことが、D児のやってみようとする気持ちにつながり、その後のいろいろな活動にも自分なりに挑戦する姿が増えた。

《反省・評価》

自分の体の動きを知ることができるような環境や保育内容を工夫しながら、自分なりにやってみようと興味をもって取り組めるように、1学期からリズム遊びを継続し、進めてきた。友達と2人組になって取り組むことで、不安な気持ちが減少し「楽しかった」「できた」という経験が少しずつ自信となり、いろいろな活動の中で興味をもって自分なりにやってみようとする姿につながってきた。また、一人一人の姿や発達を見極めながらできた喜びややってみようとする気持ちを丁寧を受け止め援助してきたことが、園児の自信につながった。

進級当初、保育者との関わりが多かったD児であるが、今では遊びを通して友達の姿に目を向け、「同じこと(もの)がいい」「一緒にしたい」と、友達を意識して過ごす姿も増えてきている。

【4歳児】 9月中旬 「ポップコーン、高く弾けさせたい！」

運動会に向けて友達と気持ちを合わせてパラバルーンのリズム表現をする中で、“ポップコーン”の技にみんなで挑戦してみることにした。「高く弾けさせたい！」という子ども達の思いを受け止め、“弾けやすい物”、“どうしたら弾けるか”など、子ども達と“ポップコーン研究所”と呼び、取り組んだ。「何を使ってポップコーンする？」と保育者が問いかけ、遊びで使っていたカラーボールや新聞



でつくった玉、ボールなどを子ども達と用意し、試すと様々な気付きがでてきた。「ボールは上がりにくい」「新聞の玉も重い」「カラーボールは上がりやすい」など子ども達が気付いたことを言葉で伝え合った。「軽い玉をみんなでつくってみたい」との声が聞かれ、梱包材を使って玉づくりをし、ポップコーンに挑戦してみた。梱包材の玉は軽いため、とても高く弾け、子ども達は大喜び。「量もたくさんあったらいいな」との声があり、みんなでたくさんの玉づくりをし、“より高く弾けさせたい”とみんなで考えた。初めは気球を膨らませるようにやってみたが、「バルーンを下げたらポップコーンが転がっていってしまう」と気付いた。「玉がバルーンに入ったらすぐに腕を上には伸ばして上げていこう」との声が聞かれ、みんなで試してみた。するととても高く弾け、「やったー！大成功やー！」と達成感や満足感を味わうことができた。

《反省・評価》

体を動かす楽しさをみんなで感じることができるようリトミックやリズム遊びを、計画的に取り入れてきた。日々の表現遊びを運動会でのバルーン表現に取り入れることで、楽しみながら取り組む姿が見られた。また様々な友達との関わりが見られるようになり、友達と気持ちを合わせてバルーンをみんなで楽しみたいという気持ちが大きくなっていく中で、友達のことを応援したり、出来た事は一緒に喜び合ったりする姿と同時に、友達の気持ちに気付いたり、力加減を考えたりする姿も見られるようになってきた。

みんなで様々なもので試し考え合う機会をつくったことで、思いを伝えたり、考えに共感したりする様子も見られた。また重さや軽さにも気づくことができ、みんなで試行錯誤したことは、上手くできたときの達成感や満足感、更なる意欲にもつながった。

【5歳児】 11月上旬 「染め物研究中で一す！」

春に収穫したタマネギの皮を使って染め物をし、「ほかの草花や実でも染まるのかな？」と話していた子ども達。タマネギ染めで使った布と同じものを用意しておく、ヨモギやツルムラサキの実など使いたい素材を自分で選んで色水をつくり、試す姿が見られた。別の素材でも布に色がつくことを確認した子ども達は「タマネギ染めの時みたいに洗濯で取れないようにミョウバン液につけたい」と試して



みると、「真っ白になっちゃった」と思っていた結果にはならなかった。うまくいなくても自分なりに考えたり友達と相談したりしてあきらめずに取り組んでほしいと思い、「どうしたらうまく色が付くのかな。他の友達にも相談してみる？」と保育者が言うと、周りにいた友達に呼びかけ、話し合う中で「タマネギの時は液が濃かったけど、今回は液が薄かったのかも」「もっと長い時間漬けたらいいんかな」「ミョウバンに漬けない方がいいんちゃう」「グツグツ煮込まないとあかんのかも」「次はミョウバン液につけずに干してみよう」「材料たっぷり使って濃い液につけてみる」「お湯でやってみたいな」と、原因と対策を考え次への期待につながった。後日、「染め物研究中で一す」と、考えたことを試していた子ども達。「ミョウバンにつけなかったらきれいな色のまま乾いたで！」と嬉しそうに話していた。しかし次の日、「お洗濯しようと思って水につけたら色取れちゃったわ！」と、結局うまく色はつかなかった。「もっと濃い液でやってみようか」「またみんなに相談するしかないか」と、諦めずに試そうとする姿が見られた。

《反省・評価》

5月には芝滑りの研究、夏にはトイを使った川づくりの研究など、様々な遊びの中で子ども達は考えを出し合い試そうとする姿があった。今回の染め物の研究では、様々な素材や方法を工夫し、自分の考えや友達の考えを試す喜びを味わってほしいと思い、環境を用意した。予想通りにならなかったことも、保育者が周りの友達にも相談できることを伝えたことで、「なぜ色がつかなかったのか」「次はこうしてみよう」と同じ目的に向かって互いの考えを出し合いながら進めていこうとする意欲につながった。

これらの経験は、遊びの中で上手いいかないことがあっても諦めずに取り組んだり、友達に相談したりする姿につながり、「やってみたい」という思いや「こうしたらどうなるかな」という疑問を解決しようとする学びの芽生えになると思われる。

5. 研究の成果

子どもがやってみたいと思える環境構成や援助を探っていく中で、保育者が子ども一人一人の発達段階や育ちを把握し、どのようなことに「やってみたい」「おもしろそう」「もっとしたい」と思っているのかなど興味や関心を見極めることの大切さがわかった。またその上で、どのような力をつけていきたいのか、その為にはどのような経験や遊びが必要であるかを常に念頭におき、環境構成や援助を工夫することが、子ども達の主体的な姿につながった。

子どもにとって、園は安心して自分を表出できる場であるからこそ、自分の思いや願い、考えを表情、仕草、態度、言葉など様々な方法で表現し、初めての遊びや経験に取り組んだり、諦めずに繰り返したりする姿につながる。その為にも保育者が子ども一人一人の思いに丁寧に寄り添い、安定した生活や遊びの中で、様々な経験を積み重ねることができるよう、信頼関係を築くことはとても重要である。

6. 今後の課題

今後も、安心できる環境のもと、子ども理解を深め、各年齢で発達段階に応じた保育内容の充実を図るとともに、子ども達が心と体を動かし、主体的に活動できる環境や援助の工夫に努めていきたい。